

# 神戸川農総研 菜根菜試験成績書 No.19 (1988.3)

## 1. 研究課題名 ルバーブの栽培法確立試験

イ. ほ場軟化法での遮光期間の検討

## 2. 担当者 成松次郎

3. 目的 前年度に圃場栽培で軟化葉を得る方法を開発したが、ルバーブの永年性作物としての特性を生かした軟化栽培法を確立するためには、軟化収穫が根株の消耗に及ぼす影響を明らかにすることが重要である。そこで、本試験では、遮光期間の長短が軟化葉の収量と根株の草勢に及ぼす影響を調査する。

## 4. 試験研究方法

(1) 品種 ‘マイヤッツ・ビクトリア’

(2) 軟化方法

ア. 供試個体 実生より育成した1年生株

イ. 栽植方法 条間90cm, 株間45cm

ウ. 遮光方法 反射性フィルム(シルバーポリトウ厚0.07mm, 幅185cm)を、ほう芽期の1987年3月2日にトンネル状に被覆し、それぞれの収穫期間中、遮光を続けた。

エ. 調査方法 ほぼ5日おきに観察し、葉柄長が30cm以上に達した葉を収穫し、本数と葉柄重を記録した。

(3) 試験区

a. S-1 (4月4日まで遮光・収穫)

b. S-2 (4月18日 " )

c. S-3 (4月28日 " )

(4) 試験区の大きさ 1区15~18株 反復なし

## 5. 結果の概要・要約

(1) 本年は暖冬傾向のため、例年よりほう芽開始は早く2月下旬~3月上旬となり、収穫は3月20日より始まった。

(2) 収量は、S-1では1株当たり合計<sup>368</sup>~~364~~gであった。S-2では同741g, S-3では同850gとなり、両区とも4月9日に最大収量を示した。さらに、S-2, S-3では、収穫期後半は葉柄が細くなり一本重が小さくなる傾向を示した。

(3) 葉柄の赤色発現は、収穫期初期ほど鮮明であったが、後期とくにS-3の4月下旬は着色が悪かった。

(4) 株の草勢を維持しながらの複数年にわたる収穫法を考える場合、単年度の結果から適切な判断はできない。しかし、収穫終了後の生育状況の観察からは、S-3では株の弱勢化がみられること、一定の収量性を望むことから、S-2が有望と推測された。すなわち、圃場軟化期間は30日程度が良いと考えられる。